



悪役令息に言葉責め

されるものもあるくないが

やつぱりお仕置きして
屈辱を味わってもらいます

俺は多忙なゲームクリエイター。

女性向けのゲーム制作に携わり、ぎりぎり納期に間に合い、今はほつと一息。

休憩所のソファでうとうとしていたら、同僚たちの雑談が耳に。

「あの風俗店に、今回のゲームの悪役令息そっくりな男がいるんだって？」

「そうそう『貴族のぼくに、こんな下世話なことをさせるなんて！』って嘆くのが口癖とか。」

ゲームどおりの設定でプレイするらしいよ」

にわかに起きあがった俺は、二人に詳細を教えてもらい、早速、風俗店へ。

果たして指名した「オルガ（キャラと同じ源氏名）」は本当にゲームからでてきたような麗しき青年。

「お、お帰りなさいませ、ご主人さま・・・」と苦虫を噛み潰したような顔で挨拶するのが、まさに屈辱に震える悪役令息。

彼を見て思いだされるのは納期が迫り、切羽詰まっていたとき。

「ぼくの前で息をしないでくれる？

芋臭さがうつっちゃうから」

「よく恥を着て歩けるね。

ぼくなら生きていられないよ」

オルガの辛らつな台詞を聞いては「くう、はうああ！」と抜いていたもので。

精神的に追いつめられるあまり、倒錯的な性行為に耽ったのだろう。

といっても、ふだんの俺はマゾではない。

ので、正気にもどった今は「よくも、あのときの俺に追い打ちを」と憎たらしく思い、それはそれで興奮もして。